

2019 年度春学期 研究者交流支援制度招聘プログラム 実施報告書

国際日本学部 教授 藤本由香里

招聘者：デボラ ミッシェル シャムーン (Deborah Michelle Shamon) 准教授
所属機関：シンガポール国立大学 (National University of Singapore) 日本学研究科
滞在期間：2019/6/3～2019/7/3

デボラ・シャムーン博士はアメリカ東海岸出身。十代の頃に初期の日本漫画の翻訳に触れて研究の道を志し、カリフォルニア大学バークレー校で PhD を取得。現在はアジアのトップ大学であるシンガポール国立大学の日本研究科で日本のポップカルチャーを含む日本文化を教えている。そのシャムーン先生を招き、2019 年度春学期における研究者交流支援制度招聘プログラムの助成を受け、以下の三つの特別講義を行った。

記

- 1、6月14日(金) 18:30～21:00 於：中野キャンパス 6F ラウンジ
教員フォーラム (大学院生も参加可) 参加者：約 40 名
テーマ：「海外における日本文化研究の現状と課題」(使用言語：英語)

共編著として日本のポップカルチャーを教える教科書『Teaching Japanese Popculture』も書いている立場から、海外で日本のポップカルチャーがどう教えられているかを概説していただいた。とくにポップカルチャーに力を入れている国際日本学部の教員フォーラムとしては意義深いものであり、教員からばかりでなく大学院生からの質問も相次いだ。教員フォーラムは講演のあと軽いパーティーが続くのだが、ふだんの教員フォーラムを上回る盛況で、英語話者の教員と日本語話者の教員が入り混じった交流が各所で行われ、途中で帰る人がほとんどおらず、21 時を迎えて司会者が「これ以上はスタッフの方の負担になるから」と声をかけるまで活発な議論が続いていた。国際日本学部と、シンガポール国立大学との交流をはかる意味でも非常に有意義な会だったと思う。経過は聞いていたが、シャムーン先生の来日に前後して、明治大学とシンガポール国立大学との大学間協定が実現した。

- 2、6月17日(月) 18時半～20時半 於：駿河台キャンパス グローバルホール
ジェンダーセンター定例会 司会・田中洋美先生 参加者：約 100 名
テーマ：「海外研究者から見た日本の少女文化とジェンダー研究」
(使用言語：講演は英語・パワポは日本語、日本語のハンドアウトを配布)

シャムーン博士の単著『Passionate Friendship: The Aesthetics of Girl's Culture in Japan』は日本の少女文化についての研究書である。本講演では、少女文化やポップカルチャーのみならず、まず、江戸時代の若衆文化が男色を当たり前ものとしながらも、構造としては「大人の男性」なら性愛の相手に女性も男性も選ぶことができるという成人男性のヘゲモニーを前提としており、現在のセクシュアリティの自由とは基本的に違うことが指摘された。続いて歌舞伎・宝塚などの男性だけ・女性だけの演劇の解説へと進み、宝塚



から少女文化、とくにその中に見られる“Passionate Friendship”（シャムーン先生の単著の題名でもある）を取り上げるとともに、こうした女性たちが作り上げた「女性同士の強い絆」の文化は、やがて谷崎潤一郎『卍』などに取り入れられ、川端康成においても、のちに中里恒子の代作だったことがわかった『乙女の港』、そして『美しさと哀しみと』にも援用されていくことを指摘した。約 100 名の聴衆が熱心に聞き入っており、その 8 割以上が、ジェンダーセンターの催しには初めて参加する人だった。英語と日本語で活発に質疑応答が行われ、閉会後も並んで質問する人が長い間途切れなかった。

3、6月29日（土）15時～17時 於：中野キャンパス高層棟 515 教室
国際日本学研究科特別公開講座 参加者：約 110～120 名
「英語圏（イギリス・アメリカ）の少女マンガ文化～日本との比較から」
（一般来場可。使用言語：日本語）

一般にも開かれた最後の広義では、あまり日本で知られていないアメリカやイギリスの少女マンガとそれに対する研究が紹介され、それと日本の少女マンガが比較して語られた。とくに焦点をあてられたのが水野英子『ファイヤー！』である。この作品は重要であることは認識されながらも、日本国内の少女マンガ研究では本格的に取り上げられたことがあまりなく、本発表が日本において日本語でなされたことは画期的なことであった。会場には日本の、そして海外の少女マンガの研究者も多く、たつぷりと約 1 時間の質疑応答の時間の中で、フランスの少女マンガの歴史的状況についても来場者から語られるなど、非常に意義深い会となった。

以上、三つの講義ともそれぞれに有意義なものであるとともに、氏の研究領域の幅広さと、それを貫く明確な視点があることが感じられる講義であった。氏の来日と前後してシンガポール国立大学と明治大学との大学間協定が結ばれたことも喜ばしいことである。

以上